

総会記念シンポジウム

2019年6月21日

Aさん:グループホーム世話人

Bさん:Aさんの元上司

Cさん:高齢者デイサービス職員

高橋薫さん:コーディネーター

佐藤洋作さん:コメンテーター

A:

今の仕事に就く前は、かんばん屋を作る会社にいましたが、倒産しました。何度か仕事を辞めるたびに、1年くらい引きこもるサイクルだった。お金が無くなれば働く、働ける、という感じだったが、今回はズルズルと4年経って、思うように外出できなくなり、自分でもこれは重症だと思った。

母の勧めで「すぎトレ」の就労支援へ行ってみることになり、福祉の企業（現在の勤務先）の説明会に出た。福祉の対象には子ども、高齢者、障害者がある。最初は福祉の仕事は無理だと思っていた。高齢者と笑顔で体操するのが嫌だった。嫌すぎて自分が壊れる、と思った。障害者支援の説明だけ聞いてみたら、自分と重なりあう部分を感じて、阿佐ヶ谷福祉工房に見学に行った。最初は面喰って、でも一人の利用者さんが握手を求めてきて、手を握り返したら、なんだかできそうな気がした。

「すぎトレ（杉並区の就労支援機関）」で支援を受けて、自分が自信を取り戻すのを感じられて、自分と同じ引きこもりの友人もできたり、支え合いを感じた。就労支援の場で人に支えられた経験から、人を支える仕事もよいか、と思えた。

グループホームを勧められて、言われるがままに配属された。だめだったらまた以前のように工場の仕事を探せばいいと思った。失うものは何もない。

洋作:

職を転々としたのはどうして？

A:

いつも正社員に誘われるので、いつでも正社員になれると思っていた。30歳過ぎたら、声がかからなくなった。かんばん屋さんにはよくしてもらったので、そこが無くなって、ショックだった。

就職活動で履歴書を書く時になると、「いままでの人生、自分は何をやっていたのだろう」と鬱状態になる。就職面談時に、引きこもりであることを正直に言うべきか、取り繕うのがいい

のか。就労支援機関に相談しても、答えが出なかった。

いまの職場では「のどから手が出るほど欲しい(人材)」と言われたのが、嬉しかった。

C:

高校卒業後、医薬品商社の情報処理を 11 年やった。配置転換もあり、リーダー職になって、とても疲れて辞めた。転職しようと思ったが、リーマンショックで本当に職がなく、今の職場につながる頃には 40 歳。

車の運転できる?と聞かれ、デイホームの送迎をやることにした。送迎は朝と夕方なので、その間はやることがないから、一旦帰宅してもいいと言われたけど、それも面倒なので、送迎の合間のコップ洗いなどを手伝うことになった。最初は週1回からだった。

その後、身体介助に必要な初任者研修を受けて、この仕事を続けていくか、悩んだ結果、常勤をやってみることにした。今、常勤になって3年目。仕事自体は面白くないが、一緒に働く仲間がよかった。もし失職したら、また福祉に行くとは思えない。

パソコン仕事は周りで何をしているのかが、わからなかったが、今は誰が何をやっているのかが、よくわかることが心地よい。チームワークを感じられる。問題はあるが、それも含めてここがいい。

高橋薫:

なぜ初任者研修を受けたのですか?

C:

断りきれなかっただけ。資格取ってやってみないと、常勤でやれるかどうか判断がつかないと思った。

洋作:

(ちゃんとした)福祉労働者になれたか?(洋作さんは C さんの勤め先の代表)

C:

定員 40 名のデイサービスで職員は4名くらい。人手が足りない。とても忙しい。

高橋薫:

福祉の現場は、最初はびっくりしませんでしたか?

C:

笑顔で歌うのも、20 代は厳しいかもしれないけど。年を取って、いまは大丈夫。今日も歌って来ました。

高橋薫:

最初は福祉を全く考えていなかったお二人ですが、A さんを受け入れた側の B さん、自己紹介と A さんに会った時の話をお願いします。

B:

私は高校で(やんちゃをして)無期停学になり、無期停学の間受験シーズンが終わってしまい、やることないから演劇の養成所に行った。お金はないけど、なんとか生きていて、好きな音楽をやっていた。音楽療法をやっている人に紹介され、29 歳でいたるセンターのデイサービスで週3回歌っていた。

好きな人が出来て、その実家に結婚の申し込みに行ったら「無職じゃだめ」と言われたので、いたるセンターに就職した。

自分が責任者を任されていたグループホームに、A さんが初めて来た日は大雪の日で、靴もべちゃべちゃで、テンション低い感じだった。夕方来て、一度帰宅して、また翌朝きた。

A:

今考えると、一旦帰宅なんて面倒だと感じるけど、あの時は仕事に飢えていたので、面倒でも働けたことが嬉しかった。

B:

グループホームの仕事は、仕事から帰宅する利用者を迎え、お風呂、夕飯、くつろぎタイム、就寝、起床、朝ご飯、送り出し。仕事としては高いスキルが必要なものではない。でも、利用者さんは職場や通勤途中で嫌な思いをしたり、ストレスを抱えて帰ってくるのだが、それを受け止め、ほぐしてあげるのも仕事。

A:

自分も色々失敗があって、昨日も、炊込みご飯を失敗した(笑)。利用者に謝って、ゆるしてもらった。

アルバイトの時は低く見られ、トラブルもあったけど。お前、とかジジイとか言われていたけれど。B さんの後任で世話人(責任者)になったら、一目おいてくれるようになった。責任者として扱ってくれるのが嬉しい。

高橋薫:

何か困ることは?

A:

なんだかイライラすると言われたりします。

洋作:

利用者さんから、自分は嫌われているのではないか、という感覚をどう克服したのですか？

A:

克服はしなかったけれど、無職に比べれば、ましだった。試練だと思った。荒れるなら荒れろ、と開き直れた。おどおどしなくなった。

カラオケ大会があって、忙しいなら来なくていいよと言われたけど、行ったら喜んでくれた。最初は「信頼できるかわからない」と言われたが、お金（管理を任されているお小遣い）を渡したら、「信頼できる」と言われた（笑）。

初任者研修は高齢者のことばかりだった。価値観を同じにはいけない。感情移入してはいけない、一線をひかなければいけない、というのが難しいと感じた。

B:

世話人が不安だと、伝搬するので、利用者さんも不安定だったんですね。

高橋薫:

大変な仕事ですよ。

B:

自分が異動することになって、後任を考えた時に、みんなの辛い気持ちがわからないと仕事にならない。その点、Aさんは適任だった。

A:

若い人、人生経験のない人は大変かも。いろんな経験をした人にはオススメの仕事です。

B:

福祉って、「いるのが仕事」みたいな面があって、存在することが仕事だと思う。

A:

グループホームは管理者によって、雰囲気が違う。アットホームで、仕事をしている気がしなかった。自分が作ったご飯を食べてくれたのが嬉しかった。

高橋薫：

Cさんはこれが仕事でいいのかな、と思わなかったですか？

C：

正直、今でも、高齢者の傾聴は苦手。前職と違って、数字で測れないから。コミュニケーションとるのが仕事だから、第三者が納得するような仕事ではないなと思う。給料が出ているから続けている。

洋作：

結婚したし、子どもも生まれたしな。

C：

アンケートなどに社会人と書けるし、親戚にも会える（会わず顔がある）。気持ちは落ち着く。福祉の仕事は対人なので、メンバー（利用者さん）が変われば、すべて変わる。その人達のことをまた一から覚えるのは面倒かな。週1から働けるのが、柔軟でよかった。その人に合った働き方をさせてくれる職場でよかった。

資格を取って、常勤になると月給になるし、責任が生まれる。日本で生きていくには、それが必要だと思っていた。社会が認めている自分になれることで、安心した。

短時間になったり、ぐらぐらすると、また不安になると思う。福祉職は給与が安い。ある意味公共的な仕事だから、儲かるはずはないし、安いのは仕方ない。

高橋薫：

それでも続けるのは何故ですか？

C：

就活が面倒くさい。なんとか生活できているから。これでいいのかな、と。

洋作：

理事長は無給だから、職員の給与は業界では高い方だよ。

高橋薫：

若いと仕事の重さを感じてしまう、という意見に対してはどう思いますか？

C：

「おじいちゃん、おばあちゃんたちと話をする時間が好き」とかよく聞くけど、実際はゆっくり話している時間なんてなくて、トイレの世話がメインだったりする。時間に追われているし。やっ

ていることは結構ハード。

高橋薫：

福祉という共通点はあるけど、グループホームなどとは規模も違うから、色々違いますね。こんな風に働きたい、とかありますか？

C：

現場以外の仕事が多くて。レクリエーションの準備とか、広報誌作成とか。

洋作：

市場化しているので、介護以外のこともしたり、買い物を手伝ったり。

A：

通所予備軍をつのって、三軒茶屋で買い物したりしています。

洋作：

カフェをやったりね。

A：

あれは(将来の利用者獲得のための)営業です。はい。

洋作：

お金にならないけど、色々なことをやるから、稼働率が高い。職場は合意しているの？やらされてる感じ？

A：

有休も取れるし、まあ、いいのでは。

高橋薫：

経営者目線で動くように言われています？

A：

はい。年3回、経営収支が公開されているから、他の部門との比較もできます。

～ 質問タイム ～

松岡：

いまの仲間であるから、というのはどのような部分ですか？

C：

助け合う感じが、すぐわかる。重い利用者さんだと手助けしてくれたり、バックアップし合う感じですよ。

みんなが、全ての仕事ができるから、お互いに手助けしてあげられる。これは最初から感じていた。組織的にうまくいっている。

松岡：

大嫌いな人はいます？

C：

うまが合わない人はいますが、仕事上ではちゃんとやっています。

大畑：

働かなければいけないと思いながら引きこもっていて、働こうとアクションできたのはなぜだったのか。

A：

親のプレッシャー、追い出されると思った。危機感。

C：

家で寝ている状態だったが、少し動ける時に、親が実家の仕事を手伝うよう言ってくれたのがよかった。段々と求人誌を見て、これならできるかな？と思えるようになった。でも、応募して落ちるとまた落ち込む、という感じだった。

洋作：

プレッシャーを受け止められるパワーが回復したのだろうね。

記者：

男の人にとって、父親との関係性はどんな意味があったか。母親とはどうだったのか。

C:

母を早く亡くしていたので。比較できないです。

A:

私は父に似ていて、だから、あまり好きじゃない。お酒を飲みながら、無職時代の話をして泣いていたけれど、共感できなかった。母親は逆効果だとわかっている何も言わない。その無言がきつかった。父は就職情報誌を持ってきたり、自室のドアの下から手紙を入れてきたりした。(嫌だった)就職できたのは俺のおかげと言われるのも嫌だった。

高橋薫:

色々な思いを感じている若者と、福祉との相性はいいのだな、と思いました。

洋作:

福祉は全人格的な、支援者・非支援者の関係で、人間が共存するということを作る仕事。感覚的に、自分をさらけ出す場。しゃべれなくても、そばにすることが、基本の現場。コマとして与えられた仕事をやらされて(代替えはいくらでもいる)、そのくせ、いないと困ると言われる矛盾。

福祉の現場は支援される人と協働している営みである。存在することが喜ばれる仕事。ハードルは高いけど、そのようなことを感じられる仕事。多様な関わり方が用意されていることが大事。仕事の上での荷が重い時期は非常勤に戻れる。行ったりきたりができるのがいい。

C:

非常勤に戻って、続けていることが、すごい。普通なら常勤がダメだと思えばすっぱり辞めてしまう。またルートに戻れるのが大事。

洋作:

不便を抱える者同士が出合っている。だからわかり合える。しんどさや喜びが技術的ではなく、感じ合える。児童福祉の現場も似ている。

親の子育ての延長と捉えられ、職員の専門性が低く見られていることが問題。

C:

家族を安心して預けられる場所があれば、日本全体の生産性は上がると思う。そういうことも語りあえる職場であるのが大事。

猛烈な人手不足だから、現場はどんな人でも必要。そういう人を受入れることが大事だと、経営者が考えてくれるといい。

仕事は厳しくても、優しい職場がいい。

洋作：

社会福祉法人は法人同士でも支えあう任務がある。福祉に株式会社が参入してきて、どうなっていくか。

2025 年問題、団塊ジュニアが後期高齢者になる。ヤングケアラーの出口としても福祉の現場は大事。労働市場の問題。これから当会の課題かもしれない。